

「……はあ……はあ……つ、待て……ザックス、限界だ……。魔力を………」

北の果て、魔獣が跋扈する黒い森。

王国最強と謳われる美しき魔導騎士、エルヴィス・グランヴェールは、凜々しいかんばせを汗に歪ませて膝をついた。

金髪緑目の白馬の王子様の風貌。

王都では翠の騎士様と声高く噂する娘が後を絶たない。

叩き上げて騎士団から近衛騎士団へ。

近衛騎士団からも飛び抜けこの国の英雄として選ばれた。

千年に一度の魔導を纏った聖剣を扱う、天才騎士であった。

幼い頃から我流の魔導を操り、独自の魔剣技の才能を開花させていたエルヴィスは、ありあまる魔力量を引き換えに魔力の効率が極端に悪い特異体質となってしまった。

一振りですべてを割り、一閃で魔獣の群れを焼き払うその絶大な武力と引き換えに、体内の魔

力はまたたく間に底をついてしまう。

「あー……またかよ。マジで燃費悪いな、お前」

背後から苛立ちの混じった、怠けきった低い声が降ってきた。

国から派遣された白魔道士、ザックス・ストラウド。

二〇〇センチを超える巨軀は、屈するエルヴィスに対し、長い足を折り曲げもせずただ見下ろしていた。

「おい……悠長に見るな」

「ハハ。足ガクガクで怒られてもな」

オスとしての魅惑を持って余す美声。

ニヤニヤとうつつすら笑みを浮かべる軽薄な垂れた目元。野性味ある太い眉。

無造作に伸びた黒髪は流していて、浅黒い張った肌はワイルドさを演出する。

敬虔な黒い牧師服を纏っているが、着くだしているし、その立派な体軀は隠しきれていな

いし、少し覗く首元や手首には、血管がバキバキと隆起している。

聖職者なのか？こいつ。怪しすぎる。

というか、ヒーラーでもっと綺麗で可憐なシスター様をだな…。いや、職に偏見など…。しかしなんで剣闘士のようにがちりとした、しかも顔のやけに良い男が……。

真面目だがそれなりにむつつりのエルヴィスは初対面時、不服な感想を抱いたが、彼の白魔法はそれでも一流であった。

…性格がとことん合わないのだ。

「ザックス……早く回復しろ…このままでは、次の群れが来た時に……」

「わーってるよ。メンドークセエ……さっきも回復しただろ？騎士サマの横でヤニ叩いてりゃ帰れる仕事だつて聞いてきたのに死ぬほど忙しいじゃねーかクソ」

「しょうがないだろう…俺は白魔法が出来ない。それにその物言いはなんだ、国を救うことは誉じゃないと？」

「あーあ。キマジメちゃんがよ。俺はヤニとファックの方が大切だぜ」

ようやく渋々、杖を取り出し詠唱を始めるザックス。

エルヴィスは目を瞑り癒しを待ち構える。が、一向に来ない施しに、訝しげに片目を開く。

「あ、回復魔法のMPキレてるわ」

「何っ？お前MP剤のストックは……！！」

ザックスは悪びれもせずべーっと舌を出して仰け反っている。エルヴィスは頭に怒りマークを増やし続ける。

「もう今日の回復終わり。なあ。諦めて酒場行こうぜ？」

「ふざけるな……！！ダメに決まっている！俺には国の命運がかかっているんだ。今ここで何とんでも回復しろ！」

「はあ……？そうかよオ。どうしてもってんなら……しょうがねえなア」

ザックスはおもむろにエルヴィスの目の前に歩み寄る。

その距離感はまるで恋人の接吻するかのようで、エルヴィスは動揺した。しかもその手には聖印も杖も握られていない。

代わりに、彼は胴囲を緩め既に猛々しく脈打つ供給源を露わにした。

「……っ……!?!」

「他の回復法しかねえなあ」

ザックスの眼光が、獲物を狙う肉食獣のように鋭く光った。

「待て……っ、待て待て待て!!!!ふざけるな……っ! そんな回復方法聞いたことない!!」

「急に生娘みたいな反応するなよ興奮すつから♡これは俺にしか出来ない秘技なんだからそりゃ聞いたことないだろう？ 大体オネダリしてきたのはエルヴィスちゃん、お前の方じゃん？」

「そつ…。それはこんな…ふざけたやり方では…知らなかったから…くッ！」

「知らないのが悪い。大人しくまんこだしてその木にしがみついろ。ほら、処女貫通式だ」  
「ああっ変態どこを触ってる！ちよッ…！！このッツやめ…ッツ！！待ってザックス…っ！んんっ、あっつ！！！」

ザックスの大きな手が、エルヴィスの装飾華美な甲冑の隙間に指をかけ、無理やりほとんど丸裸にする。

「……………おい、オイオイオイ。なあーんだこのなまつ白くてエッツツロイケツ？顔だけ見りゃイケるなと思つてたけどよ、こんなエロケツ隠してたんなら話が違うだろう？」  
もつつつ…ちり♡♡♡とエルヴィスの小ぶりかつ丸い白尻を撫でて。

そして、パァン♡♡♡♡と尻肉をすっ叩いた。

「うひ…ッ♡なあ…あっつ！？」

赤くなった尻を見て満足げに鼻歌を歌いながら、ザックスの巨軀に見合った骨ばった手のひらは、尻肉を揉みこんでくる。

「み……、る、なああ揉むツツなああ♡♡♡♡♡あううっ♡♡♡♡♡離せっ……!?!?♡」

なんだこれなんだこれ何が起きてる!?

生まれて二十二年、こんな屈辱的なことはない!

歯を食いしばり愛撫に暴れるが、魔力切れの絶対的疲労感、そして圧倒的怪力により、イタズラされてもされるがままでびくとも抵抗することができない。

「騎士っつーもんはもつとガテン系だと思ってたけどよ、こんな生真面目な鎧の下にほっさい腰にむっちりケツ…力も俺にも満たない♡とんだドスケベ隙ありエロ騎士様じゃねーか♡♡♡魔力なかったらこんな非力なんて♡急にヤル気出てきたわ。オラ、エルちゃんケツ突き出せ♡♡」

ザックスは抵抗するエルヴィスの細い手首を掴み、巨木の幹に頭上でひとまとめに押し付けさせる。

覆うような体格差のザックスに合わせた体勢に足が浮きかけるエルヴィスはバランスを取ろうとして、臀を突き出すようになってしまった。

ザックスはオス臭い笑みを浮かべ口笛を吹く。取り出した熱い塊を、エルヴィスの純潔な

アナルに挨拶のようにくつつける。

むちゅっ♡ちゅっ♡グプ♡

「んつつっ♡♡ ひゃっ♡アツツ♡♡ うぐウ~~~~んんん……っ♡♡♡ あああっ♡♡  
あっ……♡♡ やめ、ああっ♡♡ なあアツ……!?!?!♡♡♡ あっ、ん、ふうっ♡♡ あ、あ  
♡♡♡ し、ぬ……♡♡♡ ひぎゅっ、んうああアツ!!♡♡♡」

ぬっちゅ♡♡ ぐぼっ♡♡♡♡♡♡♡、ぐぶう~~~~♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

規格外の剛直が、狭い処女の壁を強引に蹂躪し、未踏の最奥——魔力回路の接合部へと突き刺さる。エルヴィスは衝撃に身を震わせ、大樹の皮に爪を立てて舌を出していた。

ああああ♡♡♡♡♡剣のようにかたくて、おっきい……♡♡♡♡♡

幼くして王に剣を誓っていたエルヴィスは、強き信念で衆道にも触れず奇跡的に生きてこられた。清廉潔白であった。

だから、巨根メガトンちんぽに体をメスに作り変えられ、屈服させられるのも仕方がないことだった。

「ははっ!騎士様のナカめちやくちや狭えー♡♡♡ほら供給してやるよ♡♡たっぷり飲み

